
;インフィニット・ストラトス> ~Story of black knight~

暇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS > インフィニット・ストラトス > Story of black knight

【Zコード】

N3778T

【作者名】

暇人

【あらすじ】

織斑 一夏には天才的な双子の兄がいた。だが兄は小学校卒業の日を境にして姿を消してしまった。それから3年余りの時が過ぎ、一夏がIS学園に入学した時、一人は再会を果たすのであった。この物語はそこから始まる。IS > インフィニット・ストラトス > の一次創作です。処女作なので文才もなく、矛盾も多々あると思いますが楽しんで読んで頂ければ幸いです。あと内容がかぶつてたら申し訳ありませんm(ーー)m

プロローグ

「朝か・・・・・」

まだ日が昇り始めたばかりの時間に目を覚まし、そう呟いてから俺は自分の左右を見回す。

右には20代の女性が左には自分と同年代少女が寄り添つようじて寝ていた。

「またか・・・・・」

そうまたなのである、だが1年以上も毎日同じことを繰り返せば感覚が麻痺してくるのか、それ以上大きなリアクションをすることもなく二人を起こさないようにして俺は起き上がりタオルと竹刀を片手に外に出て朝の日課を開始した。

「996・・・997・・・998・・・999・・・千つ！――」

千本の素振りを終えて汗を軽く拭き、次に俺は朝食を作るべく台所へ向かった。

朝食ができる時間に合わせたかのように一人は起きてきた。

「おはよう～、れ～くん」

「おはよう、零夜」

「ああ、おはよう

束姉、イブ」

二人に笑顔で朝の挨拶を交わし、俺たちは席に着いた。

「いただきま～す」

「頂きます」

束姉は行儀悪く、イブは行儀良く食べていく、そんな光景を見ながらこれでは、どちらが年上かわからないなと笑みを浮かべながらふと実姉と実弟のことを思い浮かべた。

「あれから3年か・・・」

理由あって俺は3年前、姉弟の前から何も云わずに突然姿を消した。巻き込まないようにする為とはいえ、今更ながら酷い事をしたものだと思いを馳せていた。

ふと箸を咥えながらテレビを見ていた束姉が騒ぎ出した。

「れ～くん～れ～くん～！」

「ん～、何？束姉？」

回想の海に潜り「～」とした所を引っ張り揚げられた為、そつけない返

事をしてしまひ。

「たいへん!、たいへんだよーーー!」

「だから何が?」

「こっくんがテレビにでてるーーー!」

「・・・・・・・・・・・えつーーー!」

束姉の言葉に驚きながらテレビを見て固まってしまった。そしてほ
3年ぶりに見た弟が引き攣った表情で映っていた。

「えつーー? それじゃあ今映つていいこの男の子が、零夜が話してい
た弟なの?」

イブが驚きながらも俺に確かめてきたが、俺は画面端の文章を見て
驚愕していた。その文章はこいつ書かれていた
かせる男子現れるーー!』と

(一夏がIRSを動かしただつてーー!?)

「これは、おもしろいことになつたねえーー。世界中が動き出さよ
おーー!」

まるで、おもしろくて仕方ないよつて言つて束姉の言葉に僕は答えら
れなかつた。

世界中が動く
さつとその影で再び『奴等』が蠢きだす

あうつ」とを俺はびこか予感していたから。

第1話 再会する3人

『IS』、正式名称『インフィニット・ストラトス』宇宙空間での活動想定して作られたマルチフォーム・スーツである。10年前に開発されたそれは、現代兵器を圧倒的に上回るスペック持っていた為、『兵器』としての可能性を見出された。その後各国の思惑から現在は『スポーツ』という形をとっている。ISには大きな特徴として基本的には『女性にしか』動かせない。そしてIS学園は、IS操縦者育成を目的とした教育機関である。所謂『女子高』、『女子の園』である。

IS学園ゲート前、そこに本来は在りえない筈の男子用制服を着た黒髪の少年と制服を着た銀髪の少女が立っていた。

「ここに来るのも『1年ぶりか』あの時はまさか、ここに学生として通うとは夢にも思わなかつたな、なあ、イブ？」

少年は、隣に立つ少女に同意を求めた。

「そうね、あの時の私たちの立場からは考えられないわよね。まあそれも零夜の弟がISを動かしちやつたもんねえ」

少女は苦笑い混じりに応えた。

「おとうと愚弟のせいで『めんな』」

2ヶ月前、一夏がI.Sを動かしたというニュースが報道されてから、すぐに一夏が身柄の一時的な保護の為、I.S学園に入学させられると予測が出来た。それに対して俺はどういう行動を取ればいいか考え、悩んだ末、入学することを決意した。

余談だが、それを聞いた時の束姉の拗ねっぷりが半端じゃなかつた。その約1ヶ月後、どうしても一緒に行くといって聞かないイブと共に入学試験を受ける為、3年ぶりに『あの人』に会いに行つた

入試で殺されるかと思つた。

この時も束姉が『なら自分も学園に行くと』無茶を言い出したのを宥めるのが大変だつた。

そして色々準備があつた為、入学式には参加できず、I.I.Jで『あの人』を待つていた。

「すまない、会議が長くなつて待たせてしまつたな

『あの人』、千冬姉はそう言いながら歩いてきた。

「いや、いいよ。どうせ会議が長引いたのも、俺や一夏絡みのせいで千冬、いや、織斑先生かな？」

と俺は少しだらつぽい笑みを浮かべながら言つた。

「ふつ、まつたくお前は相変わらずそういう所は鋭いのだな

千冬姉は苦笑いを浮かべながらどこか呆れたよつと、俺の隣

に立つイブに声を掛けた。

「イブもよく来たな、歓迎する」

「ありがとうございました。あの通り私たちのクラス割りはどいつなりましたか?」

「ああ、お前たち一人は事情が事情なのでな、一夏と同じ1組に私が捻じ込んだ。ちなみに担任は私だ」

「そりいえば篠もりに通つて東姉に聞いたんだけど、どのくらいなんだ？」

「ああ、あいつもお前たち同じ1組だ」

「そつかあ、第三回のむろ年ぶりかあ・・・・・」
「ん? どうしたんだイブ?」

ふと隣に立つイブを見ると、ドーンと怒っているような不満そうな顔をしていた。

「知らないつ！！」

ふいつと横を向くイブに対して、俺が首を傾げていると、千冬姉がくくくと笑みを浮かべながら言った。

「そっち方面は相変わらずか、イブも苦労しているようだな、だがこれからも大変だぞ、あれの妹も強敵だからな」

「はあ～～～～」

千冬姉の言葉に対して深いため息をついた、本当にどうしたんだろう？

「さて時間も押している、話はこれぐらいにして、案内するところが、二人ともついてこない」

「「はいっ」」

颯爽と歩いていく千冬姉の後を俺たちはついていった。

「では、私が呼んだら入つてこい」

そう言い残し千冬姉は教室に入つてき、俺たち一人は廊下に残された。

「ねえ零夜？」

「うん？ なに？」

「零夜の弟つてどんな感じなの？」

「うーん、そうだなあ、なんて言えばいいかなあ

イブの問いにどう応えたものかと考えていたら、教室の方から俺とよく似た声が聞こえてきた。

『げえつ、関羽！？』

『誰が三国志の武将だ、馬鹿者！？！』

パンツと廊下にまで大きい音が響いてきた。

「…………」

「え、と、零夜、今のってまさか？」

苦笑いを浮かべながらイブが聞いてきた。

「…………あ、今のは間違いなく一夏だ」

俺は少し呆れながらもイブに応えた。

「そ、うなんだ……」

ああ、今できっとイブの中で『織斑一夏=おバカな子』とインプレされたんだろうなあと思った。

『それではHRを終わりにする…………と言いたいが、事情があつて式に出れなかつた奴が一人いてな…………入つてこい』

「失礼します」

「では、二人とも自己紹介しろ」

「じゃあ、私から先にするね？」

「ああ、わかつた」

イブが一步前に出て背筋をピシッと伸ばしながら教室全体を眺めた。

「イブ＝ヒーテンです。趣味は読書です。皆さんこれから一年間よろしくお願いします」

簡潔に綺麗にまとめたイブの自己紹介に対して俺は周りの反応を見てみた。

（イブは『学校』に通うなんてはじめての経験だからな、俺がフォローしないとな。）

『綺麗な人ねえ・・・』

『お人形さんみたい・・・』

『お持ち帰りしたい・・・』

とまあ主にイブの姿勢に対する反応が多かったが好意的に受け入れて貰えたようで安心した、最後のはまあ聞かなかつたことにしょう。うん、そうじょい。

静かに騒ぐ生徒たちに対する千冬姉は手を叩き静めさせた

「静かにしり！・・・次、挨拶しり」

「織斑零夜です、これから一年よろしく・・・」

「　「　「　「ズキュー———ン」　「　「

「だからかそんな効果音が聞こえてきた気がした。そして一瞬の静寂の後

「　「　「　「キヤア———ツツツツツ———」　「　「

窓ガラスが割れるんじゃないかと思つてしまつて大音響が響いた。

『何あの人！？凄く格好いい！…』

『お父さん、お母さん、私を産んでくれてありがとうございます！…』

『おりむくとは似てながらビコが違う魅力を感じるねえ～

『　　・・・・・・・・・・織斑君？』　『　　』

騒いでいた女の子たちが田をぱちくつさせながら質問してきた。

「ああ、俺も織斑先生の弟で一夏の双子の兄だ」

俺の一言でまた教室中が騒ぎ出しだが、俺は入ってきた時に見つけていた。3年ぶりに会つ弟と6年ぶりに会つ幼馴染に再会の言葉を告げた。

「ただいま、一夏。そして、久しぶり、篠。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3778t/>

IS <インフィニット・ストラatos> ~ Story of black knight ~
2011年10月9日03時36分発行